

2026（令和8）年度

2日〔**〕

国語

注意

- 1 開始の合図があるまでは、開かないこと。試験時間は、六十分である。
- 2 問題は声を出して読まないこと。
- 3 問題用紙は二十六ページ、、の二題から成っている。
- 4 問題用紙および解答用紙に、落丁、乱丁、汚損あるいは印刷不鮮明の箇所などがある場合は、手をあげて監督者に申し出ること。ただし、**内容に関する質問は受けつけない。**
- 5 解答は必ず**黒色鉛筆**を使用し、**解答用紙に記入すること。**
- 6 解答はすべてマーク式の解答欄①②…を丁寧に塗って解答すること。
- 7 訂正箇所は、消しゴムで**完全に消すこと。**
- 8 解答に関係のない符号（?レなど）や文字は記入しないこと。
- 9 解答用紙を折ったり、汚したりしないこと。

一
次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

科学的事実が医学あるいは技術として利用されると、実際に現実を動かし、社会を変えることができる。これは、ベーコンが希求した通りである。

例えば、微生物学の発展によって、結核菌などの病原菌が一九世紀に発見された。自然界には、肉眼では見えないけれど、病原となる微生物が存在するという単純な事実である。そして二〇世紀になると、ペニシリンなどの抗生物質の発見と利用によって、結核は治療することが可能になった。また、大正時代の日本では、脚気は結核と並ぶ二大国民病であった。医学や生化学の発展によって有機化合物のビタミンが発見され、脚気はビタミンB₁の欠乏症であるという単純な事実が判明した。脚気は、食事の改善もしくはビタミンB₁の投与によって、完全に克服された。

医学や公衆^(ア)エイセイの発展によって、以前は高かった乳幼児の死亡率も減少し、これまで治療できなかった病気も克服されてきた。江戸時代の日本では、前工業期のヨーロッパと同じく、出生児の二〇%近くが一歳未満で死亡していたという。現在では、この数値は〇・二三%である(厚生労働省の統計情報・白書による)。明治二四年(1891)の日本人の平均寿命は四二〜四四歳台であったが、現在では八一〜八七歳台である。

賢治は科学・技術の進歩に明るい信頼を寄せていた。『グスコブドリの伝記』では、火山の爆発の制御、潮汐発電、人工降雨(あらかじめ肥料が入っている)、そして気温の制御などに、科学・技術が善用されている。私もまた前節では、自然科学をかなり肯定的に紹介してしまった。しかし、科学は全幅^(あ)の信頼に値するものなのか？

公平に言って、それは樂觀的すぎるように思える。この節では、科学の否定的側面について述べておかねばならない。

科学そのものは、人間のもつ「願い」や「祈り」とか「思い」とは無縁な世界である。科学には、経験的事実とその理性的解釈、そしてそれら一連を束ねる学説があるだけなのだ。したがって、人間の倫理に関することは科学からは何も出てこない。言いかえると、科学は「善悪」という倫理とは本来的に無縁である。だからこそ、科学・技術は善用もできるし悪用もできる。

例えば、毒ガスを兵器として開発することは、善か悪か？ 科学そのものは何も答えない。実際、ドイツの優れた化学者フリッツ・ハーバーは、第一次世界大戦時に毒ガスを開発し、その使用を実戦で指揮した。一方で、その同一人物が、空中の窒素からアンモニアを合成する方法（空中窒素固定法）を開発し、肥料を安価に製造することにより農業に貢献した。このように、ある科学者の知的能力と倫理的判断能力は別種なものである。

X

科学者たちと政治家たちは、「これによって戦争を早く終わらせることができれば、多くの人命を救うことができる」と言い訳をした。善悪の基準がない世界、つまり「知」だけの世界では、人は何とでも言い抜けすることができる。

化学と物理学の他に、生物学もまた悪用された。その中でも、特に進化論・優生学と、人種学が特に関係する。

生物学の結果や理論を、そのまま広く人間の生活や社会に持ち込むことは「生物学至上主義」と呼ばれる。生物学至上主義は問題をもたらしことが多い。なぜかという点、人間は生物ではあるが、生物の原則が必ずしも当てはまらない「奇妙な」動物だからだ。一般の生物にとって、「生存と繁殖」が自然からの至上命令である。人間もまた自然から同じ命令を受けている。しかし重要なことに、人間の場合は、その人の意志によっては、従わないこともあり得る。例えば、グスコブドリのように、人々のために自分を犠牲にすることもあり得るし、賢治のように結婚せずに子孫を作らない選択もできる。そのような人間に、生物の一般原則をそのまま当てはめるのは間違いのもとだ。

生物学至上主義的に「適者生存」という曖昧な概念を人間社会に適用すると、いわゆる「社会ダーウィニズム」になる。社会ダーウィニズムとは、個体あるいは民族の間での無慈悲な生存闘争が「生命の法則」であり、人類社会にも「強者の繁栄、弱者の滅亡（ユウシヨウレットパイ）」が適用されるのが正義だとするものである。これは、欧米人の白人至上主義と人種差別、奴隷制、侵略戦争、そして植民地主義を **I** する科学的な支柱となった。ヒトラーとナチス・ドイツの冷酷無情な暴力は、この思想、優生学、そして「人種学」を土台にしていた。ヒトラーはユダヤ人を憎悪し、人類を「最高等な文化創

造者^々（自分たちのアーリア人）、^々文化支持者^々（日本人などの非アーリア人）、そして^々文化破壊者^々（ユダヤ人）、という三種類の^々人種^々に分けた。

念のため述べておくと、現代ではナチスの^々人種^々観はまったくのデタラメであることが明確になっている。一八世紀以来、人類の起源が一つであるか（単一起源論）、それとも複数であるか（多地域進化説）は、長年の論争になっていた。しかし現在では、分子系統解析やゲノム解析などによってアフリカ単一起源論が支持されている。現生人類（ホモ・サピエンス）の祖先はごく小さな集団であり、アフリカから出た際にネアンデルタール人やデニソワ人などの近縁の旧人類とわずかに交雑し、その後世界中にカクサ^ンした。いわゆる人種とは、ホモ・サピエンス内の地域的に異なる遺伝的集団と考えられている。現生人類の遺伝的形質は、地域的集団によって異なることが確かにあるけれど（髪質、皮膚の色素、歯の形、鎌状赤血球貧血症などの遺伝的病気、生乳の消化能力、など）、一般的には、むしろ共通性が高い。人類集団は常に混じり合い、移動し続けてきた。旧来のさまざまな^々人種^々概念は、生命科学・技術の進歩によって根拠を失った。

科学・技術の発達を手放して賞賛できる時代は、核力が兵器に利用された二〇世紀の中頃には終わってしまった、と私は思う。科学・技術の力が大きくなり、人類社会に対して巨大な害悪になり得ること、そんなことは、ベーコンには想像もできなかっただろう。人間の知的生産力と経済的欲求にまかすのではなく、何らかの規範によって科学・技術の方向性を制御しないと、それは無益であり破壊的なものになってしまう。

オーストリアの動物行動学者のコンラート・ローレンツは、動物の行動を科学として分析し、比較行動学という研究分野を創始した世界的な動物学者である。彼の名著『ソロモンの指輪』は、動物への愛にあふれた楽しい著書で、私の学生時代からの愛読書でもある。彼は、現代の支配的社会的秩序を「技術主義的システム^{テクノロジー}」と呼び、技術が人類の圧政者の地位につく恐れがあると警告している。そして彼は、本来は目的を達成する手段であるはずの活動が、現代では自己目的になっているという。

さらに現代では、公害、化学物質の環境汚染、原子力発電所などの事故、そして高レベル放射性廃棄物の問題（多数の専門家と言うように、地殻変動の激しい日本では、廃棄物を地下に閉じ込めるのは無理）、などの科学・技術の発展から生じた数

多くの問題が起きている。特に、二〇一一年の福島第一原発の重大事故は、危うく東日本を壊滅させるところだった。そうならなかったのは、まったく **Ⅱ** だった。日本のような地震が多発する狭い国土で原発を稼働させるのは、危険極まりない。

また、生殖医療や遺伝子操作技術の進歩にともない、生命操作に関わる倫理的問題が現在大きくなりつつある。生命操作は、もともとは不妊治療や遺伝子治療を目的として発展してきたものだが、医学本来の範囲を超えて適用される恐れが出てきた。問題になる生命操作の一つは、ゲノム編集による人間の遺伝子改変（デザイナー・ベビー）である。これは実際にすでに中国で行われ、その子どもの出産が二〇一八年に発表されて物議を醸した。これらの問題に関しては、スコット・ギルバートとクララ・ピントーコレイアの『BIRTH—いのちの始まりを考える講義』が参考になる。ギルバートは発生物学者として人間の発生を説明し、ピントーコレイアは不妊治療を受けた女性発生物学者として自分の経験を踏まえて論じている。また、医師・生物学者で国際ヒトゲノム計画のリーダーを勤めたフランシス・コリンズも、生命倫理を冷静に論じている。

一部の専門家たちは、一般の人たちがもつ生命操作に対する不安を、無知蒙昧な反応だと思っているようである。しかし、この不安の背後には、**Y** がある。生命操作は、科学の知的挑戦や経済的成功だけの問題ではない。これは、性、生殖、家族、そして人間の性質、などを根本的に変える問題でもある。特に人間の生殖細胞の遺伝的改変は、遺伝を通じて未来の人類をも変えてしまう。私たちには、まだ生まれていない、未来の人類に対しても倫理的責任があるはずだ。

倫理に関することは科学では扱えないとしたら、倫理は一体何を根拠にしているのだろうか？ これについては、例をあげて簡略に触れておきたい。

人類の歴史は悲惨と逆説に満ちているが、非常に **Ⅲ** に見ると、倫理的には向上してきたと言えるのではないだろうか。多くの現代社会では、思想・宗教・表現の自由を含む基本的人権が善きものとされており、これを尊重することが当然視されるようになってきた。しかし、あらゆる人間には等しく権利があるという倫理は、どこから来たのだろうか？

基本的人権という理想は、身分制、圧政、暴虐、殺戮、怒り、そして暴動と反乱という苦しみに満ちた人類の長い歴史を経

て、キリスト教圏でようやく生まれてきたものである。人類の悲惨な体験によって、社会の状況、人々の常識的考え方、そして価値観が次第に変わってきたのである。一七七六年のアメリカ「独立宣言」の前文には、「すべての人間は生まれながらにして平等であり、その創造主によって、生命、自由、および幸福の追求を含む不可侵の権利を与えられている」という文言がある。「創造主によって」という言葉に注目されたい。人権^cという理念は、「人間は神に似せて創られた」という、人間の価値的評価と深く関わっている。

このように、倫理には「知」だけではなく、むしろ「知・情・意」のすべてを含む人間の全精神が関わってきたのだ。

人権の理想は、それを保持・実現するためには大きな努力を要する。一八世紀のフランス革命で人権が謳^いわれたにもかかわらず、フランスは黒人奴隷貿易を一九世紀中頃まで続けていた。アメリカ「独立宣言」を執筆した人たちがさえも、当時、黒人奴隷を所有していた。アメリカ合衆国の奴隷制が制度的に廃止されるのは、一九世紀中頃に南北戦争が終わってからであった。まして歴史と宗教が異なる国民には、人権思想が簡単には根づかないことがあり得るだろう。例えば、私たち東アジア人には、身分制と男尊女卑の長い歴史があるため、「人間の間の等級づけ」が深く染み込んでいるのかもしれない。

（石川裕二『科学と賢治と宗教と』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。）

問一 傍線部(ア) (ウ) のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) エイセイ

- 1 時代の変化をハンエイする
- 2 敵ジンエイの動向を探る
- 3 自然の美にエイタンする
- 4 キエイの新人が入団する
- 5 政治家のゴエイを固める

(イ) ユウシヨウレツパイ

- 1 製品のイシヨウ登録をする
- 2 ケイシヨウ地を訪問する
- 3 監督はメイシヨウと評判だ
- 4 食糧の備蓄をスイシヨウする
- 5 人助けでヒヨウシヨウされる

(ウ) カクサン

- 1 大企業のサンカに入る
- 2 サンビを極める事態だ
- 3 領土をサンシヨクされる
- 4 月に一度はサンパツする
- 5 サンバシに船を係留する

問二 傍線部(あ)・(い)の語の意味として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(あ) 全幅の

- 1 行き過ぎた
- 2 あらん限りの
- 3 心が赴くままの
- 4 人間の側からの
- 5 人の道に照らして

(い) 謳われた

- 1 主張された
- 2 広められた
- 3 洗練された
- 4 生み出された
- 5 理想化された

問三 空欄 I } III に入る語句として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- | | | | | | |
|-----|----------|----------|-----------|-------|-------|
| I | 1 偶像化 | 2 象徴化 | 3 制度化 | 4 正当化 | 5 単純化 |
| II | 1 発想の妙 | 2 自然の摂理 | 3 参照すべき事例 | | |
| | 4 計算外の結果 | 5 紙一重の偶然 | | | |
| III | 1 巨視的 | 2 限定的 | 3 個別的 | 4 心情的 | 5 直感的 |

問四 傍線部 A 楽観的すぎるように思える とあるが、筆者がこのように述べる理由の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 科学には確固たる根拠があるという無謬性への信仰が世間一般には根強く、正当な批判を受けてこなかったから
- 2 自然科学は人間性に無関心であることが糾弾され続けているが、それが改善されない歴史的経緯があるから
- 3 科学は善悪の判断には関与しない領域であるため、時には人類にとって負の作用をおよぼすこともありえるから
- 4 科学が人類の進歩に貢献してきた事実を当然視する態度への批判が、隣接する他の学問分野から出来しているから
- 5 科学に関わる人々はおおむね倫理を欠いた行動をするものであり、これまでも社会に深刻な影響を及ぼしてきたから

問五 空欄

X

の段落を構成する次の文 i ～ v を正しい順序に並べたものを後の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

号を答えなさい。

- i この第二次世界大戦では、原子力(核力)が兵器に利用された。
- ii 軍人の死者数二二〇〇〇二五〇〇万人、民間人の死者数三八〇〇〇五五〇〇万人と言われている。
- iii 賢治が永眠した一九三三年には、ヒトラーがドイツの独裁者となり、一九三九年から人類史上最大の戦争が始まった。
- iv ロバート・オッペンハイマーなどのアメリカの物理学者たちの大半は、嬉々として原爆を開発したのである。
- v 人類の存続を脅かしかねないほどの大量破壊兵器を作ることについてさえも、科学からは善悪の判断が強力には出てこなかった。

- | | | | | | | | | | |
|---|-----|---|-----|---|-----|---|----|---|----|
| 1 | iii | ↓ | ii | ↓ | v | ↓ | i | ↓ | iv |
| 2 | v | ↓ | iii | ↓ | ii | ↓ | iv | ↓ | i |
| 3 | iii | ↓ | ii | ↓ | iv | ↓ | v | ↓ | i |
| 4 | v | ↓ | i | ↓ | iii | ↓ | ii | ↓ | iv |
| 5 | iii | ↓ | ii | ↓ | i | ↓ | v | ↓ | iv |

問六 傍線部 B 何らかの規範の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 科学への要請が変容することを自覚し、科学者の社会的責任や判断基準も柔軟に変える必要があると認識すること
- 2 科学者が独立した地位を保つには、法律や制度によって定められ明文化された行動基準に従うべきだと考えること
- 3 科学の客観性に依拠しすぎた判断や行動を慎み、社会を構成する人々の選択と価値観を尊重する姿勢を忘れないこと
- 4 客観的に構築された科学的な知見であっても、それがあらゆる場面に適用可能なものであるとは考えないこと
- 5 科学が及ぼす影響についての価値判断は、その外部で議論されるべきものであるという中立性重視の姿勢を保つこと

問七 空欄 Y に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 生命の定義が動揺することへの科学的な知見からくる戸惑い
- 2 科学を出し抜いて自らの人生を自らが決定することへの執着
- 3 科学研究者の社会に対する責任意識を啓発したいという欲求
- 4 科学的知見を無視して生命の神聖さを過度に美化した猜疑心
- 5 生命に対する人工的操作や生命のビジネス化に対する嫌悪感

問八 傍線部C 人権という理念とあるが、筆者がこの理念に言及した目的の説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 現代社会で人権が当然視されるに至った長い過程を説明し、倫理の理念が歴史的にどのような形成されてきたかを示すため
- 2 人権理念の由来を明確に示したうえで、科学や倫理が社会制度によって適切に管理されるべきであるという筆者の立場を明らかにするため
- 3 科学が単体では善悪の判断を持ちえないのは、倫理が「知」だけでなく人間のあらゆる精神と関わるものであるからだということを示すため
- 4 科学技術が過去に人間社会へ及ぼしてきた負の影響を踏まえ、今後は科学独自の倫理的判断基準を備えていく必要があることを示すため
- 5 人間の尊厳を保障する人権思想は世界共通の価値であるという前提に立ち、それを科学の発展に必要な基本的理念として再確認するため

問九 本文の内容や議論の展開と合致しないものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 科学的知見は、医学や技術として応用されることで現実世界に大きな影響を与え、社会を変革してきたことも事実である
- 2 差別的ともとられかねない内容の段落に対し、補足説明を加えてその事実を否定するという論展開が文章の中盤に見られる
- 3 自然科学分野の研究成果を人文・社会科学のような他の学問領域に安易に援用することについて、筆者は批判的である
- 4 科学者がなした研究や発明が科学の善用か悪用かという判断は同時代人には不可能で、客観的な判定には歴史的な検証が必要である
- 5 筆者は「化学・物理分野」と「生物分野」の二つを大きくとりあげたうえで、それらを総合して倫理との関係を述べている
- 6 人権の実現には文化的背景が深く関係しているので、科学者が倫理的責任を自覚することにもまた相応の時間と困難が伴う

二

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

十七世紀末から十八世紀初めにかけてラテン語は多くの国でその国語によって排除されていくのだが、それより早く印刷術による自国語本の発行は、十六世紀になると、書物における言葉すなわち文章語としての地位を諸国語に与えるようになる。

それと I にして文法が構築され、さらに言葉の表記における規格統一化が促されるようになったとフェーブルとマルタンは述べている。

かくて統一的な国語すなわち民族の言葉（標準語）が定められるのだが、それは印刷術がもたらしたものである。「印刷術は、経済上の理由から各国の国語による出版活動の興隆をシヨウライし、その結果、最終的には各国の国語の発展とそれによるラテン語の排除という結末をもたらしたのであった。この発展のために、結局のところ文化世界が分割されてしまったのである」。ここにナシヨナリズムと印刷術の結びつきをマクルーハンは見出す。「まずもっておのが民族の言葉を活字にして見る、という経験のなかったところにはナシヨナリズムはありえない」。ナシヨナリズム成立の背後に出版活動が存在することに着目したのがベネディクト・アンダーソンの『想像の共同体』（初版一九八三年）であることはよく知られた事実であるが、実はマクルーハンも同様の見解をアンダーソンに先駆けて提示していたのである。

ナシヨナリズムが活字印刷によってつくられるということはまた、マクルーハンのとって活字印刷の促す読者の固定的視点と透視画法ともナシヨナリズムは結びつくということだが、それは国家と個人の両義的關係をもたらす。「ナシヨナリズムは印刷、そして透視図法および視覚的数量化とともに発生した『固定された視点』に依存し、またそれから由来している。しかしながら、固定視点は集団的視点、個人的視点、また両者の視点でもありうるもので、したがって、さまざまな見解の相違、衝突を惹起させる」

マクルーハンはここでアメリカの歴史学者カールトン・ヘイズを引用する。「自由主義的ナシヨナリズムは国民国家の完全な主権を強調したが、他方、それぞれの国民国家内部の個人の自由、すなわち個人の政治的、経済的そして宗教的自由を強調

することで、この民主権の原則が含意するものに制限を加えようとつとめた」。活字印刷による視覚の分離が促す「ナショナリズムはすべての個人、すべての国民の間における等しい権利を主張する」のである。「印刷は画一的な国民生活や、中央集権主義的政府を生み出したが、同時に個人主義や反政府的態度も生み出した」のである。

この個人主義の **II** はときに以下のような形でも現れる。すなわち、〈アウトサイダー〉、疎外された人間の創造である。彼は直感的で（非理性的な）人間の典型として創造されたものである。

「われわれは、ここ数世紀を費して精力をそそぎこみ、印刷技術で口語文化を滅ぼしてきた。そのために商業社会のいわば規格製品であるわれわれは、かえってときに観光客として地理的な周辺文化を求めたり、あるいは消費者として芸術のなかに周辺文化を求めたり、いずれにせよ口語的な周辺部へと、ときたま帰還することが可能なのである。十八世紀の人間は、いくなればメトロポリタン歌劇場でヨカ^(イ)をすごしはじめたようなものだ、ということができよう。彼等はみずからを洗練し、均質化し視覚化した結果、自己疎外を起し、そのためにかえって自然人を求めてヘブリディーズ諸島へ、インド諸国へ、南北アメリカへ、そして超自然的な想像力へ、とくに幼児時代へと旅立したのであった。D・H・ローレンスははじめとする作家たちはこの現代のオデュッセウスを心から歓迎し、再現したのであった。それはもはや自動的に行われた行動であった。芸術というものは **X** となりがちなのだ。」

彼ら〈アウトサイダー〉が向かった先は、それゆえ部族的な、非文字社会の世界であったが、そこは十八世紀イギリスの新古典主義を代表する詩人アレクザンダー・ポープが「混沌と原始の夜」と呼ぶ世界だった。〈アウトサイダー〉にとつてそこは無意識の領域でもあるが、無意識とは視覚の分離が意識の領域から排除してしまったわれわれの経験のほとんどであり、それが異常発達をみた世界が部族的・非文字社会であったが故に彼らは惹かれたのである。

このように考えられるなら、従ってグデイのような、部族的な非文字社会への関心を持ち調査する文化人類学者を作り出し

たのも、またそこを植民地化し宗主国の言語と文字を押しつけ産業社会資本社会に組み込もうとした西欧の近代国家も、活字印刷術がもたらしたものといえよう。

このようにマクルーハンを解釈していくと、グデイのように声と文字の間に隔たりを認めるだけでなく、写本と活版印刷の間にマクルーハンは大きな断絶を見出しているように見える。しかしそう言い切れないのは、「文化変容の理論は、五感のさまざまな外化に応じて変化する感覚比率に関する知識なしには樹立不可能である」という章には以下のように書かれているからである。

「アルファベットや印刷物の役割は言語、芸術および社会・政治生活の全領域にわたって視覚に優先的な役割を与えることとにあった〔中略〕人びとが他の要素をさしおいて視覚的要素を格上げするまで、共同体はただただ部族的構造に終始する以外には手がなかった〔中略〕個人の非部族化は、すくなくとも過去においては、文字使用、そして特に表音文字使用だけが育てることができた強度な視覚的生活のみに拠っていた。表音文字アルファベットには個人の非部族化に手を貸すだけのじゅうぶんなユニークさがあっただけではなく、それはかなり後代になって現われたものだった。〔中略〕書字行為は非視覚的空間および感覚の囲い込み〔中略〕それは自然に行われている感覚の相互作用から視覚だけを切り離し、抽象する行為となる。そして発語が全感覚の外化（音声化）であるのに対し、書字行為は発語を抽象化する行為である。」

情報社会論の合庭惇は、それゆえ、マクルーハンの見解に従うなら視覚の切り離しがアルファベットという表音文字によって準備され、活字印刷技術が一気にそれを加速・実現させたと考えている。非文字社会のコミュニケーションは声（い）を話す―聴くという聴覚を媒介しており五感のバランスがとれていたが、「音から意味を取り去り、つぎに音を視覚的なコードに移しかえるという二重の作業をとまなう表音文字の発明があつてはじめて、人間は自分たちを変質させる経験に取り組みはじめる」ことができるからである。

しかしだとすると、口承文化との間に隔たりがあるのは文字全般ではなくアルファベットのようないくつかの表音文字だけということになる。

「ただ文字を書くという行為だけでは表音文字がもたらす非部族化現象（部族化現象とは、口承社会においてコミュニケーションは力をもつ声を媒介としている故に、聴覚が呪術性をもち、かたや視覚は中立的状態にあるということ）は生じない。〔中略〕他方、絵文字や表意文字、さらには象形文字も含めてすべて一様に、表音文字がもつ非部族化への力を持ちえない。」

「アルファベットは視覚と聴覚を分離し両者の関係を断つのみならず、それぞれそれ自体では無意味な文字と音とがⅢに結びつけられているという関係をのぞいては、すべての意味を文字の音から切り離すのである。音自体、形それ自体としての意味以外の意味がいささかでも視覚化されたり、音声化されたりしている限り、視覚と他の感覚との分離は不完全な形でのこる。たとえば表音アルファベット以外のすべての文字ではそのようなのだ。」

「中国とインドのような地域はまだ基本的には聴覚・触覚社会である。」

しかも、アルファベットの表音文字を使用する西欧中世の「写本文化が、五感のなかから視覚だけをひき離し、孤立させてしまうような視覚強調を目的とした文化ではなかった」。

それゆえ、**Y**によってであり、印刷以前の、あるいは表意文字・象形文字による書字の世界と口承の世界は地続きの可能性を残しているのである。

そうではなく、口承の世界と文字の世界全般の間には、隔たりがあると考えるのがマクルーハン^cの弟子でもあったウォルタ

「イ・オングである。」

グディのリテラシー論と同様の主張を展開しているのが『声の文化と文字の文化』のオングである。またマクルーハンの研究の成果も踏まえて、オングは、口承性のみ文化から文字の登場と写本の時代、活版印刷の発明とそれ以前の写本の時代の違い、ついで活字印刷による書物の複製化の時代が西洋の心性に与えた影響を論じている。しかしグディ同様、文字以前の声の文化と文字の登場とのあいだにある大分水嶺を強調する。

オングによれば、文字の文化で育った研究者は声の文化と文字の文化の大きな隔たりに気づかず、文字の文化ゆえの捉え方で声の文化を誤解してしまうという。例えば民俗学では昔話やことわざなどを口承文学 (oral literature) としばしば呼ぶことがある。しかし文学 (literature) とは文字で書かれたものが原義である。純粹に口頭による伝承を口承文学とよぶのは、「馬を車輪のない自動車と考えるようなもの」であり、「書かれたもの」の一変種として捉えてしまうことなのである。それは「読み書きができる人は、読み書きを知らない純粹に声の文化に属する人びとにとつてことばがどういふものであるかということ、十分に想像することができなくなっている」ことである。書くことに慣れたわれわれはことば (語) を「モノ」のように思い、解読すべき目印として受け止めてしまうが、無文字社会の人びとはそうではないのだ。

では口頭伝承は書かれた文学とどう違うのか。古代ギリシアのホメロスの叙事詩や現代のアフリカ、ユーゴスラビアの口承の物語についての研究を参照しながら、オングは次のように違いを述べている。

文字で書かれた物語にはプロット (筋立て) がある。プロットはクライマックスに向かってすすみ、そこで例えば真実が暴かれると、事態は急展開し大団円に向かう。それは結び目を作ってほどこくに喩えられる。こうしたプロットは、エドガー・アラン・ポーを嚆矢とするといわれる探偵小説において完成形態に達する。

しかし声の文化では、叙事詩や小説より短い物語でさえ「丹念に、うむことなくクライマックスへ向かうというやりかたでは組織することができない」。一つ一つのエピソード (ソウワ) は厳密な時間的順序で組織されることがなかった。「話を軌道にのせるのにてこずるのが、口誦詩人たちの特徴である」

では口承叙事詩で大切なこととは何か。それは伝承され記憶された決まり文句やスタンザ（韻律を持つ詩行の節）の型にある。叙事詩の歌い手が思い出すのは、「記憶されたテキスト」ではなく、「他の歌い手たちがかつてそれを歌い、かれがそれを聞いたところの主題やきまり文句である。かれはそれをいつも違ったふうに思いだす。つまり、特定の場で、特定の聴衆のために、自分流にそれを朗誦する〔中略〕、つまり縫いあわせる」「歌は、かつて歌われたもろもろの歌の思い出なのである」。かつて歌われた（あるいは語られた）もろもろの歌や叙事詩・物語についての記憶をその場でよみがえらせ、歌い手と聴衆が相互に働きかけ合うことで新たな叙事詩ないしそのエピソードが生まれることが声の文化の真髄なのである。語りあるいは語られる声の共同性が大切なのであり、「伝統的なことばの組み立ては手の動きと結びついている」。オーストラリアアボリジニは、歌いながらしばしば紐の模様をつくり、アフリカの吟遊詩人には弦楽器や太鼓がつきものである。話されることばはつねに身体を巻き込むのであり、声の文化では聴覚と触覚が連動するのである。このようにその世界が文字の文化とは大きく隔たっていることをオングは強調するのである。

グデイ同様オングにおいても（そしてマクルーハンによっても部分的に）、文字の出現によって声の文化や口頭でのコミュニケーションは大きく変質・進化したと捉えられているが、こうした文字と声の捉え方に、では問題はないのだろうか。それを次に考えてみたい。

（出口顯『声と文字の人類学』による。出題の都合上、一部中略した箇所がある。

なお、本文中の〔中略〕は原著者である出口氏によるものである。）

問一 傍線部(ア)～(ウ)のカタカナを漢字に改めた場合、それと同じ漢字を含む選択肢を次の各群の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(ア) ショウライ

- 1 事実をショウサイに報告する
- 2 人間国宝のショウゴウを贈る
- 3 大きな大会をショウチする
- 4 労働条件をコウショウする
- 5 議論のショウテンを絞る

(イ) ヨカ

- 1 ゴウかな食事を満喫する
- 2 彼は噂のカチュウの人物だ
- 3 スンカを惜しんで学習する
- 4 カブンにして知らない
- 5 軽微な運動をニツカとする

(ウ) ソウワ

- 1 不明者のソウサクを行う
- 2 グラフをソウニユウする
- 3 ソウカイな気分になる
- 4 ベルトをソウチャクする
- 5 窓を定期的にソウジする

問二 空欄 I III に入る語句として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

- | | |
|-----|---------|
| I | 1 軌を一 |
| II | 1 標本 |
| III | 1 仮言的 |
| | 2 言を左右 |
| | 2 座標 |
| | 2 帰納的 |
| | 3 行をさかん |
| | 3 墓標 |
| | 3 術学的 |
| | 4 声を大 |
| | 4 商標 |
| | 4 恣意的 |
| | 5 身を粉 |
| | 5 標榜 |
| | 5 暫定的 |

問三 傍線部(あ)・(い)の語の本文中の意味として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

(あ) 惹起させる

- 1 誇張する
- 2 象徴する
- 3 包含する
- 4 暗示させる
- 5 生じさせる

(い) コード

- 1 一連の情報
- 2 記号の体系
- 3 響きの表現
- 4 国家的な規則
- 5 印刷可能媒体

問四 傍線部 A ナシヨナリズムと印刷術の結びつきとあるが、どういふことか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 それぞれの国の言葉で印刷された宗教的文書の普及が進んだことで、それまで普遍的だった信仰形態が国家単位でのものへと変容し国民意識も醸成されたということ
- 2 ラテン語を排し言語の国家的統一がなされたのと同じころ、遠近法を採用した視覚芸術が印刷物として広まったことで国民の視点を同一のものに固定したということ
- 3 民族の言葉で表記された出版物が広まり人々が国語というものを視覚的に共有する経験を得たことで、集団としての一体感や国家への帰属意識が形成されたということ
- 4 印刷術の発展および印刷物の普及が各国家での統一的な国語の発展と普及を促すと同時に、中世ヨーロッパで支配的だったラテン語を排除する意味も持ったということ
- 5 民衆の識字率が向上し出版物から情報を得る機会が増えたことで、国内外の政策や時局に関する情報が迅速に広まるようになった結果として文化破壊が起きたということ

問五 傍線部 B (アウトサイダー) を説明した次の文の空欄 ・ に入る表現として最も適当なものを後の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

口語文化の衰退の中で 結果として、地理的・言語的な周縁に対する を募らせた人々

- 1 本国語の表現形式に疑問を抱いた
- 2 当初から統一的な価値観を拒んだ
- 3 いっそう理性的な思考を強化した
- 4 言語を操る技量にだけは習熟した
- 5 主体としてのありかたを見失った

- 1 嫉妬
- 2 憧憬
- 3 隔意
- 4 信憑性
- 5 優越感

問六 空欄

X

Y

に入る表現として最も適当なものを次の選択肢の中からそれぞれ一つずつ選び、その番号を答えなさい。

X 1 視覚文化を極限まで追究するための表現技法

2 個人的な感性をさらに洗練させるための媒介物

3 人間の深奥に到達するために生み出された手段

4 頭でっかちになってしまった生へのたんなる償い

5 個人が社会から逃避することを肯定する仮想空間

Y 1 口承社会における聴覚中心の呪術的世界と文字社会との間に隔たりが生じるのは表音文字の活字印刷技術

2 聴覚に依拠している無文字社会と近代的な文字社会に本質的な断絶を生んでいるのはナシヨナリズム自体

3 無文字社会と文字社会との間に隔絶が見出されるのはこの事象を後の時代に研究している人間の思い込み

4 文字による世界の隔たりは普遍的な事象というより近代の国民国家の成立という西洋における歴史的事情

5 文字の有無によって世界を二分する視点の始まりはヨーロッパ社会における印刷術の発展と印刷物の普及

問七 傍線部C ウォルター・オングの考える「声の文化」とはどのようなものか。その説明として最も適当なものを次の選択肢の中から一つ選び、その番号を答えなさい。

- 1 伝承された記憶の長さやその重要性に応じて、決まり文句や筋立てなどを臨機応変に組み合わせて聞き手への効率的な伝承を目指すもの
- 2 伝承された記憶に依存することを基本としつつ、重要な情報を迅速に伝える場合には内容の簡略化も可能になる応用の幅を持ったもの
- 3 語りに加えて視覚的な動きや楽器による聴覚的な演出などを伴うことで理解を促すなど、諸感覚の存在を前提にして発展してきたもの
- 4 主題や決まり文句の断片をその場の状況に応じて組み合わせ、語り手と聴き手が身体的にも相互に作用しながら語りを共に構築していくもの
- 5 伝承されたメロディや詩には依存せず、語り手がその場で自由に創作し即興的に感情を表現することやそれを楽しむことに価値を置いたもの

問八 本文の内容と合致しないものを、次の選択肢の中から二つを選び、その番号を答えなさい。

- 1 文化人類学者とは、文字に支配された近代的西洋人が口語的非文字社会に着目する中で生まれた存在とも言える
- 2 アンダーソンは先行するマクルーハンの見解を深化させ、ナシヨナリズムの成立と出版活動の関係を定立した
- 3 物語の筋立てを重視する西欧の文字文化は、エドガー・アラン・ポーが探偵小説を成熟させるに至り頂点に達した
- 4 オングの主張の根幹には、声と文字の性質の違いに加えて文字文化で育った人間の備えるバイアスも据えられている
- 5 発話を文字に書き起こす行為には、声という様々な感覚の複合体から必要な要素だけを抜き出すという性質がある
- 6 筆者は文字が声の文化に与えた影響について既存研究に依拠しつつ、その議論の正当性には一定の留保をつけている

国語解答用紙 2日 [**]

一

問一	(ア)	①	②	③	④	●
	(イ)	①	●	③	④	⑤
	(ウ)	①	②	③	●	⑤

問二	(あ)	①	●	③	④	⑤
	(い)	●	②	③	④	⑤

問三	I	①	②	③	●	⑤
	II	①	②	③	④	●
	III	●	②	③	④	⑤

問四		①	②	●	④	⑤
	問五	①	②	③	④	●
	問六	①	②	③	●	⑤

問七		①	②	③	④	●
	問八	①	②	●	④	⑤
	問九	①	②	③	●	⑤

二

問一	(ア)	①	②	●	④	⑤
	(イ)	①	②	●	④	⑤
	(ウ)	①	●	③	④	⑤

問二	I	●	②	③	④	⑤
	II	①	②	③	④	●
	III	①	②	③	●	⑤

問三	(あ)	①	②	③	④	●
	(い)	①	●	③	④	⑤

問四		①	②	●	④	⑤
	問五		i	①	②	③
				④	●	
	ii	①	●	③	④	⑤

問六	X	①	②	③	●	⑤
	Y	●	②	③	④	⑤

問七		①	②	③	●	⑤
	問八	①	●	●	④	⑤

49点

51点